

守るといふ必要を満たしてくれるので、このアイデンティティ状態にいる私にとって、多分、本物の記憶のように思われるであろう。そのうえ、私は新たな領土を探索するのを楽しんでいるところなので、彼は私の楽しみを妨害しようとしているのである。

彼の叫び声私の中に引き起こす不快感、たちまち怒りに転ずる。私は自分を弁護しなければならぬ（その自分とはアイデンティティ状態の探険好きなのだ、しかしそれは、その瞬間には私の全「自己」である）。私は、「あなたこそ誰なんですか？」とか、「それがあなたにどんな関係があるんですか？」とか、「そう尋ねるあなたこそ何者ですか？」とか、大声で言い返したくなりがちになる。自分を守るには、明らかに強い口調の応答が必要とされるのである。

仮に、その重大な瞬間に状態2の善き隣人が優勢だとしよう。私はその叫び声にびっくりするが、しかし即座にその男の人はおそらくその地所の所有者なのだろうと認める。つまり、私と同様に、彼は地所所有者なのだ。ちょうどわれわれの役割が逆だったら私がまさにそうするであろうように、彼は私が誰で、彼の裏庭で私が何をしているのかに関心を抱くあらゆる権利を持つている。善き隣人として、私の仲間との絆を確立し、私が彼の権利を尊重していること（私が自分自身のそれを尊重することを彼に期待するように）を彼に示し、私が誰で、なぜそこにいるのかについての彼の不安を和らげることが、私にとつて直ちに重要になる。

私の応答は、およそ次のような友好的なものになるだろう。「今日は！ 私はチャールズ・タートという、近所の者です。少しばかり川上のほうに住んでいます。お宅の庭に入って申し訳ないので、昨晩の雨で川下に流されてしまった梯子を捜しているんです。かなりの雨でしたよね。木製の小さな梯子を見ませんでしたか？ 川下の方に梯子を捜しに行ってもよろしいでしょうか？」 私のア

アイデンティティ状態はこれによって強化される。私は、善き隣人が振る舞うであろうように振る舞っている。事実、私は内面的にこれらの感情と同一化しているので、それは演技ではない——それは「真の私」である（少なくともその瞬間は）。

その重大な瞬間に、もし不法侵入者が私の優勢なアイデンティティ状態であれば、事態は全く違ってくるであろう。私は、力の強い、不愉快な大人たちのなすがままであったらびつこの時とちようど同じように、どなりつけられるであろう。私はその男の人を力の強い成人として知覚し、自分自身のことを、悪いことをしたのでどなりつけられても仕方がない、ほとんど無力な誰かとして知覚するであろう。私は不法侵入という罪を犯しているのだ！ 実際には、私の知覚が歪められているため、私には彼が実際よりも大きく見え、私の身体は実際よりも小さく感じられるのだ。

けれども、不法侵入者は成人として存在しているので、私は逃げ出そうとはせず、応答するであろう。私は次のようなことを言うかもしれない。「すみません。あなたに迷惑をかけるつもりはなかったのです。川上から来た近所の者で、昨夜の雨で押し流された梯子を捜しているだけなんです」。不法侵入者は、一見大人っぽい言葉や説明を使っている間でさえ、暗に罪を認め、後悔していることを示すことによって、直ちに成人の権威をなだめようとする。

その他のアイデンティティ状態

次にどうなるかは、叫び声をあげた男の人のアイデンティティ状態に大きく左右される。彼が自身に確信がない状態にあり、私が探險好きだとしたら、私の反撃は彼の確信のない状態を強め、自

分がそこに住んでおり（地所所有者よりもずっと弱い役割）、それで何が起きているのか知りたかった（あまり要求がましくなくスタンス）のだと彼に説明させるよう仕向けるかもしれない。そうすると、私は自分が梯子を捜していることを寛大に説明できるのだが、しかし重要な心理的出来事は、私が自分の（探険好きの）完全無欠を弁護したということであった。

もし彼が自分に確信がなく、私が善き隣人だったら、彼は同様の善き隣人的アイデンティティ状態にそっと忍び込むことができ、われわれはすみやかに事態を丸くおさめ、多分、交誼を結ぶであろう。もし私が不法侵入者なら、彼は私の罪を感じ取るかもしれない、そしてそれはなんらかの権威ある成人的アイデンティティ状態に彼が入り、私によりいつそう脅威を感じさせる確率を増すであろう。

けれども、もし私をどなりつけた男の人が自分のことを安定した地所所有者とみなす、そういうアイデンティティ状態にいるなら、探険好きに対する彼の反応はかなり敵対的になり、私に立ち去るよう命ずることもありうる。私が善き隣人的アイデンティティ状態にあれば、それに対する彼の反応は友好的かもしれない。

あるいはまた、私を見る瞬間の彼のアイデンティティ状態は、妻との取っ組み合いといった、現在の状況には全く無関係な何かによってそれ以前に誘発されたものかもしれない。私に対する彼の叫び声は怒気を含んでいるかもしれないが、しかしそれは、私とも、あるいは私とその瞬間彼の地所の上にいるという現実の状況とも、ほぼ無関係なのだ。もちろん、私はそんなことは知る由もないので、彼は私がおりにいるという現実に対処しているのだという想定に基づいて、彼の反応を解釈するであろう。などなど。われわれ二人の間には多種多様な行動と反応が起こりうるのだ。その状況でわれわれが最初のアイデンティティ状態にいる間に、もしわれわれのどちらかがしたことが、われわれの一

方あるいは両者にとつて、別のアイデンティティ状態への移行を誘発するなら、起こりうる行動と反応の多様さと予測しがたさはよりいっそう大きなものになるだろう。その状況の客観的な現実はいたつて単純だったのだが、心理が非常に紛糾するのである。

アイデンティティ状態の制御のための自己想起

自己想起については第十八章で詳しく論じる予定なのでそれまでは詳述はしないが、ここでその考えを紹介しておくことにする。基本的に、自己想起は、とりわけ、任意のいずれかの時のあなたの意識の特定の中身と同一化せず、あなたの全体性の跡をつけていくことができる、そういう意識の一面を創り出すことを伴う。それは、合意的トランスからの部分的ないし完全な覚醒である。仮に私が川下のほうに歩いている自分自身のことを想起するとしよう。

自己想起の状態で、私は自分が確かに不法侵入していたことを知るであろうが、しかし客観的に見れば、また、この不法侵入は非常に些細な事柄だったことを認識するであろう。私は、自分の目標が梯子を見つげることであり、川下に歩いていくことがそのための唯一の効果的なやり方であることを思い起こし、そしてどんな紛糾が生じても多分それに対処できるだろうという、絶対的な確信を持つであろう。私が自己想起している時は、自分の知識の全体が必要に応じてより多く利用できるようになる。

私の自己想起は熟達にはほど遠いので、多分、歩いているうちに三つのアイデンティティ状態が周囲の環境によって活性化されるであろう。他人の地所に入り、その上を歩くという状況は連想によつ

てそれら三つの状態を呼び起こし、古い条件づけを活動的にする。自己想起するにつれて、私はそれらの状態が現れてくるのを観察するであろうが、それらのどれにも同一化しないように努めるであろう。私の自己想起が未熟で、同一化のプロセスをほとんど制御できない限り、私はどのみちそれらのアイデンティティ状態の一つに同一化するかもしれないが、しかし継続的な自己想起の努力と自分の内的プロセスについての観察の結果、多分、三つのアイデンティティ状態のどれかがかなり急速に力を失い、消え去っていくであろう。

私の個人史を仮定すると、男の人の叫び声は、私を支配しているそれらのアイデンティティ状態のどれか一つにとつての特に強い刺激となるだろう。けれども、私が自己想起をなんとか続け、アイデンティティ状態に陥らなかつたと仮定すると、私は、比較的客観的なやり方で、素早く状況を評価するのである。私は、おそらくはこの男の人の地所だと思われるものの上にいる。この国の文化における財産権にからむ感情を仮定すれば、男の人は多分脅威を感じ、その結果腹を立てるのである。おそらく彼はまた、現在の状況には無関係のものの上で進行中の、他の心理的プロセスをかかえているであろう。

以上を仮定すれば、私は、彼の叫び声の厳密な特質について何を知覚できるであろうか？ 彼の顔の表情だろうか、彼の姿勢だろうか？ 彼の状態についてのさらなる手がかりを何が私に与えてくれるだろうか？ 私は状況に、それについてのできるだけ正確な情報をもって対処したいのだ。私はまた、自分が置かれている状況に関連した自分の最初の目標を思い起こし、それに照らして状況に対処したいと思う。これらには以下のものが含まれるであろう。梯子を探すこと、自己想起を続けること、いかなるアイデンティティ状態にも同一化しないように努めること、人生のあらゆる状況を物事

について教えてくれる場として活用すること、および他の人々を友好的かつ思いやりのある仕方でも扱うことである。私は、多分、それから、善き隣人の役を演じるために、自分の善き隣人的アイデンティティ状態と普通結びついた修得技能を使うことに意識的に決めるであろう。私の外面的行動は、今や、もし自分が善き隣人的アイデンティティ状態にいたら起こる行動とほとんど同じに見えるかもしれないが、しかし私は同一化していない。私の内面的状態は全く違う。これは、起こるかもしれない状況の変化に対して私に覚醒を促し続け、そのため、私はそれに適応しつつ、できるだけ効率的に自分の目的を追求することができるのである。

アイデンティティ状態の選択

一人の人の内側でのアイデンティティ状態の継起は、行き当たりばつたりのプロセスではない。三つの主要因が組み合わさって起こす作用が、ある任意の時にどのアイデンティティ状態が働くかを決定するのである。

状況的要因

第一の主要因は、人が置かれている具体的／社会的状況である。どんな状況ではどんな行動がふさわしいかについての、一般に容認された社会的ルールがある。人前で泣くことは、葬式の間ではふさわしいが、会社ではふさわしくない。本を読むことは、図書館では全く当たり前だが、フットボー

ル・ゲームでそうすることは奇異である。ダンスをすることは、パーティーではあなたが「進んでいる」ことを示すが、しかしほとんどの教会では全く不適當である。子どもの頃、適切な役割と同一化するものが適切に振る舞うためのもっとも容易に思われるやり方であることをわれわれは覚え、そのため、自分が知覚しているものとしての、自分が置かれている状況が、自動的に適切なアイデンティティとそれに応じた適切な行動を思い起こさせる傾向がある。すでに論じてきたように、われわれの知覚がどれだけ正確か——状況についてのシミュレーション——は別問題である。われわれが適切なアイデンティティ状態にある状況においては、われわれは「しっくり」し、「自然」に感じる。

知覚される期待

第二の主な要因は、特定の状況において他の人々から伝達され、あなたによって知覚される、一組の期待である。これらは、あなたがその状況の具体的、慣行的な社会的側面から得る手がかりと同じかもしれないし、同じではないかもしれない。あなたは、上に向かっていくエレベーターの中でああなたの「職場アイデンティティ」を身に付けてから、自分の職場に入っていくことができるのだが、その時、同僚たちが泣いているのに気づく。当然、通常の職場状況にはふさわしくないわけだから、それは直ちにあなたの覚醒を促し、いつもの状況になんらかの根本的な変化があったのではないかと思わせるであろう。一瞬間あなたは、実際には、二つの異なったアイデンティティ状態の狭間（はざま）にいるかもしれない。この状態は、混乱させるもの（事実そうである）として知覚されるかもしれないし、あるいは、別の観点からは、自由への道として知覚されるかもしれない。あなたは、多分、すぐに「何

があったんですか？」と尋ね、そして数分前、とても暮われていた同僚が自動車事故で死亡したのだという説明を受けるであろう。同僚たちからの手がかりが、今や、他の人に哀悼を表し／他の人を慰めるのにふさわしいアイデンティティ状態が求められていることをはっきりさせる。

他の人々は、あなたのアイデンティティがどうあるべきかについての強い期待を抱いている。彼らは、彼らの期待にかなうあなたのアイデンティティ状態を強化し、かくしてそれらの状態を安定化させる。ヤキ族の賢者ドンファンがカルロス・カスターネダに「彼の個人史をぬぐい去る」よう助言する時、他の人々からの圧力を軽減し、それによってあなたの内なる自己を発見できるようにする方法についての、健全な実用的助言を与えているのである。

人格の構造

アイデンティティ状態の誘発を左右する第三の主な要因は、あなたに利用可能な特定のアイデンティティ状態の性質を含む、あなたの人格の内部構造である。もしあなたが「正常な」人間なら、子どもの頃、長じてから人生で対処しなければならないと期待される通常の状態のほとんどに適した行動を教え込まれており（また、それに応じた内面のアイデンティティ状態を覚えている）。かくして、あなたがある状況に入る時、あなたは具体的環境とその中にいる人々の行動をさっと自動的に目に入れ、自分の側のどんな行動とアイデンティティがふさわしいかを知り、そして自動的にそのアイデンティティ状態にそっと忍び込むであろう。

あなたに施された^{しな}躰（しな）によって、人生で遭遇するあらゆる状況に適したアイデンティティ状態をあ

あなたが教えられてきた限りにおいては、あなたの人生は明らかに容易で、自動的であるだろう。あらゆる状況に対して準備ができており、その中でくつろいでいられ、そしてなすべき「分別ある、礼儀正しい」ことを自分が心得ているように思われるであろう。もちろん、人生が常にこのようにいくとは限らない。文化適応の過程で、われわれは必要とされるアイデンティティ状態へと条件づけられないことがあるかもしれない。これは個人的な苦しみをなめるという点で不幸である。とりわけ、あなたがうまく機能できない時、文化があなたに罪悪感を感じさせるような条件づけたかもしれないからである。しかしながら、個人的自由を追求するという観点からは、もしわれわれが自分の状況を真に吟味するためにみずからの苦しみを利用するなら、文化適応プロセスの不完全さは天恵となる。

アイデンティティ状態に伴う困難

第一に、われわれの多くは充分には社会化していないということである。われわれがおそらくは必要とするであろう全てのアイデンティティ状態を身につけてきたわけではないのだ。他の人々によって「正常」だとみなされていることを知っているのだが、しかし自分には合わない状況というものがある。われわれは一つの悪さや居心地の悪さを感じ、われわれの行動は強いられて緊張し、状況に合っていないと感じる。どう見ても不適切な仕方で行動したり、あるいは、適切に行動しているのだが、しかししまやかしで、わざとらしいと感じられるかもしれない。われわれは、適切なアイデンティティ状態と、それにそっと忍び込むための技能を持っていないのである。

第二に、われわれが内面的葛藤を持っていて、それがなんらかの状況のための社会的に適切なアイ

デンティティ状態をわれわれが開発したり、使ったりするのを妨げるかもしれない。仮にあなたが、謹厳実直で、神を畏怖し、罪の意識を抱いた、キリスト教原理主義者——悪魔が、肉の快楽を餌にしてわれわれをたぶらかし、絶えずわれわれを邪悪な道に誘い込もうとしていると思っている人——としての自己イメージと習慣的に同一化しているとしよう。社会的に強制的な事務所での新年会で、あなたはもう振る舞うだろう？ 少々お酒を口にしたり、踊ったり、ふざけたり、噂話をしたり、下品な冗談を言ったり、楽しい一時を過ごしたりすることができる、そういうアイデンティティ状態をあなたは持っているのではないのである。けれども、(原理主義者としてのアイデンティティの観点から見ても)さらに悪いことは、あなたが実はそのようなアイデンティティ状態を利用可能なものとして持っている場合で、そうなる、それを解放することは由々しき罪になるだろう！ もしあなたがそのアイデンティティ状態にそっと忍び込めば、あなたの原理主義者のアイデンティティ状態が朝になってあなたを厳しく問するだろうし、あなたは、新年会での自分の行動を邪悪な力によるある種の「憑依」とみなそうとする気になるであろう。

適切なアイデンティティ状態が欠けていたり、不適切なアイデンティティ状態から抜け出すことができないことは、右の例におけるような、ただ人生を楽しむことができないといったことよりずっと深刻な事態になりうる。逃げ出すことができたであろうにもかかわらず、人々が自宅の中で焼死してしまつたいくつかの事例が、とりわけ、英国にある。その人たちの身体は、錠がかかっている玄關のドアのすぐ内側で発見された。が、彼らは裸だったのだ。上品な人々は、もつとも身近な人以外の人の前で裸姿を見せることは決してない。まして、消防士や群集のような他人の前でなど。どんなアイデンティティ状態が最後に彼らの身体に宿っていたにせよ、「恥をかくよりは、たとえ自分の感覚

のあらゆる証拠に反してでも、救い出されるまで待つほうがましだ！」というのが、そのアイデンティティ状態の哲学だったようだ。アイデンティティ状態が命を奪うこともありうるのだ。

三類目の困難は、世界が変化しつつある時には、幼少期の文化適応プロセスは現在の現実はずっと遅れをとる傾向があるという事実から来る。人々が先祖たちがしてきたのとはほぼ同じような生活をし、外部からの侵入者たちも、変化を強いるような状況もない、そういう静止的な社会であれば、親たちが、ちようど自分たちがしたように子どもたちが知覚し、評価し、行動し、同一化するよう彼らを躑けることは、大いに道理にかなっている。あなたの心は、両親の心、祖父母の心、そして曾祖父の心、などなど、のように、築き上げられ、そしてあなたは同じ種類の生活状況に直面するので、彼らに適していた内面的状態と外面的行動は、（なんの変化もなかったと仮定すれば）あなたにも適しているのである。

子どもの頃、日曜学校に通わされていた時、神は執念深い神であり、両親の罪を四世代末までも子どもたちに報わせる、と教えられたことを覚えている。この考えは、残念ながら、私にはさほど不可解なものではなかった。私は、何年も恨みを抱き続ける大人たちを見ていたので、積年の恨みについてのモデルを持っていたからである。けれども、そんなふうにするというのは、明らかに神の不公平というものであった——どうして曾祖父の罪のことで、罪のない子どもたちを罰するなどということができるのだろうか？ で、いかにしてこの考えは情愛深い神という考えと調和しうるのだろうか？ 私はさほど卑しくはなく、そして神は私よりも限りなく親切であることになっていったというのに！

両親の罪が子どもたちに報わせられるという考えは、人々が両親のアイデンティティ状態を模範としたアイデンティティ状態を習得する時に起こる、不愉快でしつくりこない結果への的確な寓意で

あるというふうに、心理学者として、今私は理解している。それが神の説明として妥当かどうか、私には疑問である。これらの状態、およびそれらと結びついた技能、価値、見解は、両親や祖父母や曾祖父母には適応していたかもしれないが、しかし往々にして世界が変わってしまった今、もはやそれらはあまり適応できなくなっているのである。

たとえば、大家族の親という、長い間尊敬されてきた役割を考えてみよう。子どもをたくさん持つことは祝福されていることの徴しるしだった。事実、人々は産み、そして殖やすという義務を負っていた。産児制限や妊娠中絶（墮胎）は罪であった。墮落した罪深い快樂追求者たちはそれらを是認するかもしれないが、慎み深い人はそんなことはしない。世界にまだあまり住む人がいなかった時には、たくさんの子どもの父や母であるというアイデンティティに満足を感じることは、状況に全く適応していた。けれども、多くの貧しい国々が自国の経済成長よりも速い勢いで人口を増やし、飢餓と栄養失調によって人々を死に追い込み、生き残っている人々をさらにすさまじい貧困に追い込んでいる、現代についてはどうであろうか？

グルジェフが言う意味で真に目覚めること、すなわち、あなたが自分の能力と知性の全てを用いて自分がいる状況を現実的に評価し、自分の真正の、独自の価値に照らしてできるだけ適応的に活動することができるためには、あなたがいかなるアイデンティティ状態にもとらわれないこと——とりわけ、現実についてのあなたの知覚を妨げる状態にとらわれないこと——が必要である。同一化、およびその瞬間の機械的行動と経験の外側に留まっている何か、意識の中に発展させられなければならない。われわれの文化がどのような状況にも合うアイデンティティ状態をわれわれに与えてくれなかった場合は、人生はなだらかではない。他方、その時われわれを感じるばつの悪さや、その後

こりうる苦しみは、アイデンティティ状態を超えた個人的成長への貴重な刺激および好機となりうる。

あなたの多重性についての以上の論議が完全に納得がいくとはあなたが思っていないと私は予想している。この「私」が、今、それらについて考えているのではないだろうか？

われわれは、意識の統一性を信じ、弁護するように徹底的に条件づけられてきた。なぜ自分の多重性という考えにあなたが抵抗するのかをよく見てみることは、非常に洞察に満ちたものになりうるだろう。が、私が以前発した警告を繰り返すなら、あなたは、私の論証のいずれについても、納得がいくかどうかを論理的ベースでのみ判断すべきではない。地図は実際の土地ではない。論証というものは、あなたの以前の経験に対して、また、後の章で述べる技法を用いてあなたが持ちうる自己観察と自己想起の経験と共に、分析的に用いるべき単なる道具である。その時には、それらの有用性が明らかになるであろう。

【原注】

- (1) P. D. Ouspensky, *In Search of the Miraculous: Fragments of an Unknown Teaching* (New York: Harcourt, Brace & World, 1949), p. 59.
- (2) Ernst R. Hilgard, *Divided Consciousness: Multiple Controls in Human Thought and Action* (New York: Wiley Interscience, 1977) and "The Problem of Divided Consciousness: A Neodissociation Interpretation," *Annals of the New York Academy*.

(3) ターナー『意識の諸状態』
of Sciences 296 (1977): 48-59.

第十三章 防衛機制

われわれの人格構造には無数の不均衡や矛盾がある。たとえば、われわれのある部分はある部分に安心して居るために不断の注意を払うことを望むが、一方、他のある部分は他人の注意にさらされることに脅え、独りきりになることを望む。ある部分は一生涯懸命働いて有名になりたいと思つて居るかもしれない。他のある部分は働くことが嫌いで、惰眠をむさぼる。いくつかの点でわれわれは母親を愛するが、他のいくつかの点では彼女を憎む。人生は、また、欲求不満をもたらず。何かを欲しいと思つても、それを手に入れることができない。欲求不満のあげくの果てに起こる感情は、とりわけ、それらが人格のさまざまな側面と結びついている場合は、大きな苦しみの原因となりうる。矛盾や苦しみに対する現実的な対処の仕方があり、非現実的な対処の仕方がある。本章では、後者のほうに焦点を当てることにしよう。

われわれは、自分自身の内部に大きな矛盾がたった一つあることに気づいただけでも、ひどく苦しむ可能性がある。その多く、あるいは全部に気づいたらどうなるだろう？ もし人が自分の矛盾した部分の全てに突然気づいたとしたら、彼は多分発狂してしまふだろう、とグルージェフは語つた。幸いにも、そのような突然の、完全な自己知が起こる見込みは非常に少ない。われわれ自身の断片化した部分は、いわば、ただ行き当りばつたりに散在しているわけではない。それらは、偽りの人格の能動的な配置——変化やストレスにもかかわらずその組織を維持する配置——の部分なのである。われわれ

れが自分自身の諸部分を分離したとしても、能動的なメカニズムがそれらをそれぞれの位置に保持するのである。こうしたメカニズムのことを、グルジエフはバッファ、(緩衝装置)と呼んだ。

心理的バッファにあたる機械的類似物は、鉄道車両についているバッファである。鉄道車両が連結される時には、連結器に施錠するために一方の車両が時速数マイルの速度でもう一方の車両にぶつかる。これらの大きな鋼鉄製の車両がぶつかる時、もし衝撃が吸収され、急激な動揺が和らげられなかつたら乗客がどんな目にあうか、想像していただきたい。バッファとは、ショックアブソーバー(衝撃吸収||緩衝装置)である。それは最初の急激な動揺の突然のエネルギーの多くを吸収し、それからずっとゆるやかに、あまり気づかれぬように、それを解放する。心理的バッファは、われわれがある副人格から別のそれに切り替わる時に起こる突然の衝撃をならし、われわれがその変化に気づく見込みがなくなるほどそれを小さくしてしまう。

この種の心理的バッファ作用は特定のアイデンティティ状態内で働くことができ、また、以下に論じるように、アイデンティティ状態間での移転もまたバッファの役を果たすことができる。

この類比については、もしわれわれが望み、あるいは自分自身を訓練すれば気づくことができる、何がまだあるのだが、しかし普通は、その変化は十分に小さいので、強いてわれわれの注意を引いたりはしない、ということに注意していただきたい。不意の衝撃はバッファで処理され、消されるのである。この、われわれ自身の中の矛盾に気づく可能性は、自己観察という、第十七章で論じられるグルジエフのメソッドで利用される。

心理的防衛機制

グルジエフはバッファアの性質についてあまり詳しく書かなかつた。おそらく、そうする必要がないと考へたのだろう。自己観察に上達すればバッファアの効力を消せるはずだから、なぜそれらの研究に時間をかける必要があるのだろうか？

他方、現代心理学および精神医学は、特定の種類のバッファアについての膨大な知見を蓄積してきた。これらに相当する一般的な心理学用語は防衛機制 *defense mechanism* である。この知識はグルジエフのバッファアの概念を大いに豊かにすると、私は信じる。これら防衛機制を理解することは、もしわれわれがそれらを超越するつもりなら、非常に重要である。それらについての概念的知識もまた重要である。なぜなら、あたかもある種のバッファアが自己観察の技法に非常に抵抗するかのよう思われるからである。これらの防衛については、単独での自己観察よりは別の技法のほうが、人格構造を理解するのにより有効かもしれない。

もつとも精緻に防衛機制を調べてきた精神分析理論は、表出することが社会的に禁じられているなんなかの本能的衝動（たとえば、無制限の性欲）をわれわれが持っている時、われわれが防衛機制を使うことを示している。われわれの文化の内面化（主観化）した禁止令は、一般に超自我として言及される。強い超自我は、禁止された行為について考えることすらへの心配と恐れでわれわれをいっばいにさせ、ましてそれを行なうことなど及びもつかないようにさせる。防衛機制は、禁止された衝動にわれわれが気づかないようにさせることによって、超自我の攻撃を妨げる。防衛機制は、また、人生における失望や脅威からわれわれの気づきをそらさせるバッファアの役を果たす。神経症または精神

病というレッテルを貼られた人々の場合はきわめて明白であるが、一方、防衛機制は正常な人々によつて広範囲に、知らず知らずに使われている。防衛機制のバッファー効果なしには、われわれは合意的トランスを維持できないだろう。

何人かの人々は、そのうちの二つか三つを彼らのほぼすべての防衛欲求を満たすために用いるかもしれない。すなわち、彼らは自分の偽りの人格構造の中で中心となる、主要な防衛形態を持っているのである。が、われわれは皆、時に応じてこれらの防衛の多くを用いる。ここでは主として、合意的トランスからの覚醒という目標に関して、防衛機制を検証してみることにしよう。私は防衛機制の全て、あるいはその全ての詳細を扱うべく試みはしなかったが、しかし防衛機制についてのさらなる情報は異常心理学のどのテキストにも見出すことができる。

しかしながら、防衛機制に関する現代心理学の知識には大きな欠陥がある。それらの基礎になっている人間モデルが非常に否定的なのだ。人間は、自分自身の存続や快楽のみを本能的に気にかけて、他人々を傷つけたり支配したりすることを楽しむ動物だとみなされる。文化適応は、したがって、こうした動物的な性質を制御するために必要だとみなされる。われわれは、必要などんなものをも、いつでも欲しい時に横取りしたり、レイプする気になっている時にそうしたり、誰であれわれわれの邪魔をする人間を殺したりすることは許されない。文化適応における制約、条件づけ、および自動化——われわれのより下劣な性質を抑制するための超自我の条件づけ——は、絶対に必要なように思われている。このように、防衛機制は、通例、われわれの動物的な性質を抑制するのに効力があるとみなされている。防衛規制は、それらがあまりに効きすぎ、文明化した生活とわれわれが妥協するために本来に必要とされる以上にわれわれの幸福のより多くを奪い去るような時にのみ、神経症とみなされ

る。もし人が銀行強盗や子供へのレイプについて考えるなら、彼が罪悪感や不安に圧倒されることは結構であり、必要であるが、しかしもし彼がエレベーターに乗ることや会合で知らない人に話しかけることを考えると不安になるなら、神経症である。

私は自分が言わんとすることの要点をはっきりさせるため、西洋心理学の所説を誇張する。われわれの本質的性質に肯定的な側面を見る重要な運動が心理学には常に存在してきたし、現在も存在している（三つだけ挙げるなら、ユング心理学、人間性心理学、トランスパーソナル心理学である）。けれども、この否定的な人間観はわれわれの心理学および文化全体とからまり合っている。

部分的にこの見解とのバランスをとるため、さまざまな防衛機制がいかにもわれわれの性質のより深い、肯定的な側面の発達や発現を阻害しうるかを私は明らかにしてみたい。われわれは欠陥があり、歪められていると同時に、基本的に善良であると、私は強く信じている。われわれの課題は歪みを理解し、正して、庭から雑草を抜き取ることであり、そうすれば、われわれは善性をどんどん培っていくことができる。

嘘

全てのバッファードと防衛機制はさまざまな形の嘘であり、自分自身にも他人にも真実を偽り伝える。グルジェフは嘘を理解することに非常に重きを置いた。ほとんどの人は自分は決して嘘をつかない、あるいはごくたまにしか嘘をつかないと信じているけれども、グルジェフはほとんどの人はほとんどの時間嘘をついていると言いつ張った。自分が嘘をついていることを知らないということが、彼ら

の状況をさらに悪化させる。

意識的な嘘は、他人からの圧力に対する有効な防衛になりうる。そんなことはしませんでしたと誓う人は、外部から加えられる罰を免れるかもしれない。嘘を言い逃げることに成功するかどうかは、嘘に対する他の人々の感受性、および、その嘘を支持するかまたは覆すかかもしれない証拠の有無にかかっている。それは、時には、嘘をつく人の側の、つかれたとおりの嘘と同一化する能力を含むかもしれない。すると、その嘘は彼が言うとおりに彼にとつては真実に思われ、それを聞いている人々をだますことができるほどの確信のそぶりを彼に与える。

また、嘘をつくことに対する超自我の禁止をほとんどまたは全く持たないことも、他人をだますことに成功する見込みを増大させる。嘘をつくことについての罪悪感や不安を抱いている時に嘘をつこうとすると、あなたはしばしば、聞いている人々にあなたの嘘に対する覚醒を促す、そういう苦悩の徴しるしを見せてしまうであろう。多くの社会的結合力や安定性は、特に重要とみなされる物事について嘘をつかない人々から来るので、多くの文化適応プロセスは、もつぱら、人が嘘をついた時に彼に罪悪感を持たせて罰するであろう、強い超自我を構築することに振り向けられる。強い超自我が作り上げられなかった時には、——「強い」というのは、われわれがそれについて誠実であることが重要だと考える事柄について、真実を告げるであろうという意味である——、その人のことをわれわれは精神病質者（サイコパス）または社会病質者（ソシオパス）と呼ぶ。一般的な語法では、これは道徳的欠陥者を意味するが、精神科医や心理学者は、社会病質者という用語を科学的に使う際、そうした価値判断をするのを避けるべく努める。

あなたが意図的に嘘をついていることを知っている時は、世界についてのあなたのシミュレーション